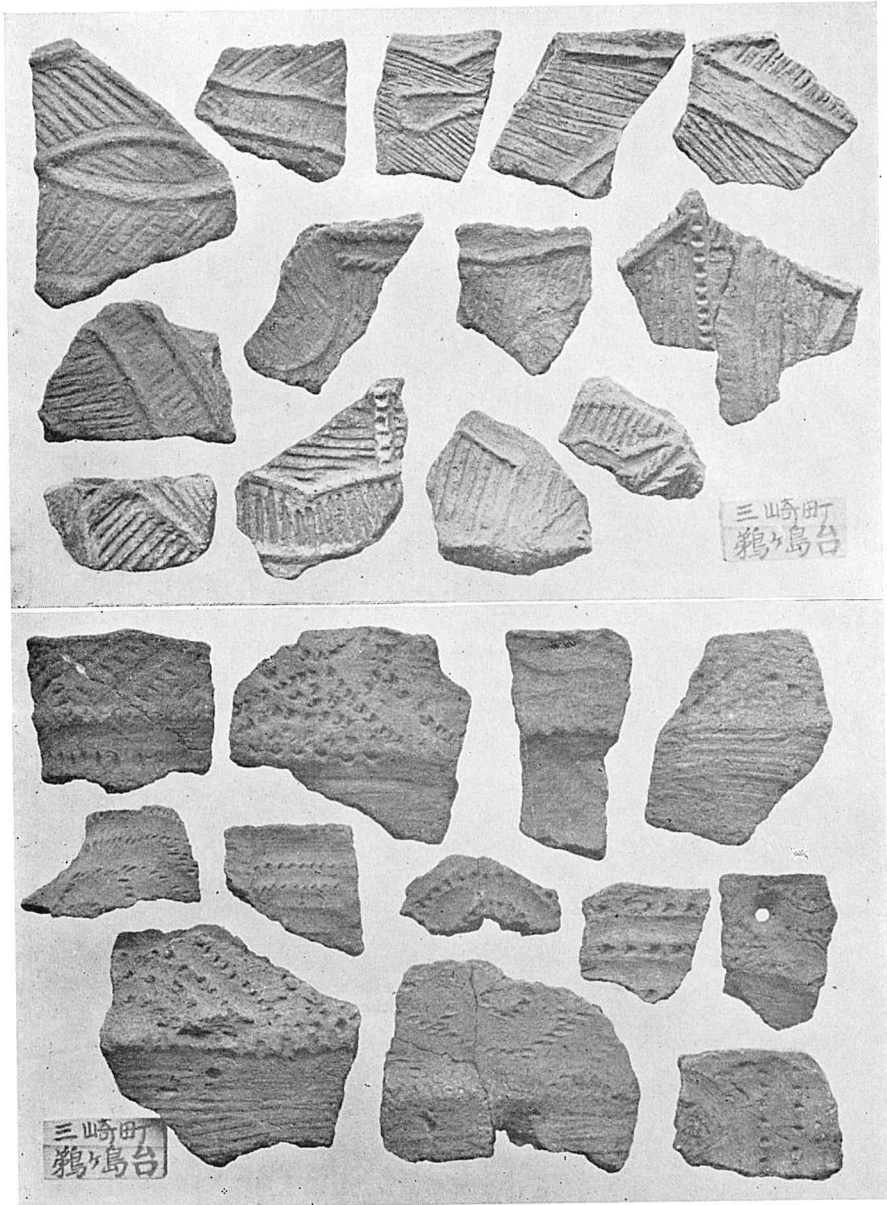


図版一 鶺鴒台式土器



図版二 野島式土器（上）と茅山下層式土器（下）

三浦市鶉ガ島台遺跡

岡 本 勇

一、はじめに

1、調査の意義

「ゆるやかな進歩」という言葉によって表現される縄文文化の、その数千年にわたるながい時代のなかには、歴史の流れをとくにはやめるような、いくつかの発展期があつたであろう。私たちは、そのような発展期がいつであり、またその発展がなにによってひきおこされたかというような問題に、大きな関心をいだいている。

いわゆる茅山式土器によって示される時期が、歴史上の発展期ないしは上昇期のひとつではなかつたかということを、かつて私は、尖底土器の消滅、集落規模の増大、労働用具の分化・改良などの諸現象をあげて考えたことがあつた。⁽¹⁾ いまでもこの考えは、基本的にはかわつていないが、ただこうした発言をするためには、もっと多くの基礎的な事実の集積と、その事実を解釈するための弾力性ある論理と思考が準備されるべきであると思つている。とくに、当面の、もっとも初歩的な課題としては、茅山式土器の細分とその編年の確立に、大きな努力をむけなければならない。

従来、茅山式とよばれてきた土器が、野島式、鶉ガ島台式、茅山下層式、茅山上層式の諸型式の順序に細分される可能性は、もはやくつがえしえないものとなつてきたが、しかし一方、それぞれの型式の内容については、十分な理解がなされているとはいきれない。とくに、鶉ガ島台式ならびに茅山上層式は、資料が不足しており、不明の点を多くのこしている。一九五八年の一〇月におこなわれた三浦市鶉ガ島台遺跡の発掘と、その翌年の一〇月から進められている横須賀市吉井貝塚の発掘とは、そのような研究上の要求をみたすことを、第一義的な目的として企画されたのであつた。鶉ガ島台遺跡の調査によって、いわゆる鶉ガ島台式土器の内容は、きわめてよくあきらかとなり、またその報告をここにおおげにすることができるようになつたのである。

2、鵜ガ島台遺跡の由来

俗に鵜ガ島台とよばれる土地から、土器や石鏃などの発見されることは、かなりはやくから知られていた。「日本石器時代人民遺物発見地名表第二版」には、すでにその事実が記載されている（佐藤伝蔵氏報）。一部の耕作地のほかは、松林によっておおわれていた鵜ガ島台の土地は、第二次大戦後開墾されて畑地となったが、このさいに若干の遺物が地表に露出した。これらの遺物を採集し、それが古い縄文式土器であることを注目したのは、浜田勘太氏であり、また茅山貝塚の土器（茅山式）などと異なる性質のものであるという疑問をいだいたのは、赤星直忠先生であった。だから、私たちが一九五四年に茅山貝塚を発掘し、茅山式土器の細分のみとおしをたてたとき、鵜ガ島台遺跡の主体をなす土器は、それと比較において問題とされ、やがて鵜ガ島台式の仮称を与えられるのである。この間の事情については『茅山貝塚』（横須賀市博物館研究報告第一号）のなかに、「三浦市鵜ガ島台出土の茅山式土器」なる一項をもうけてふれておいた。

鵜ガ島台遺跡の発掘調査は、横須賀市博物館の主催により、一九五八年一〇月一日から五日までの期間をついやしておこなわれた。この調査には、横須賀考古学会に属するつぎの方々が参加され、所期の目的を達成するために努力してくださった。もし、このささやかな報告にみるべき成果があるとすれば、それは調査に参加したもののすべての協力のたまものにはほかならない。

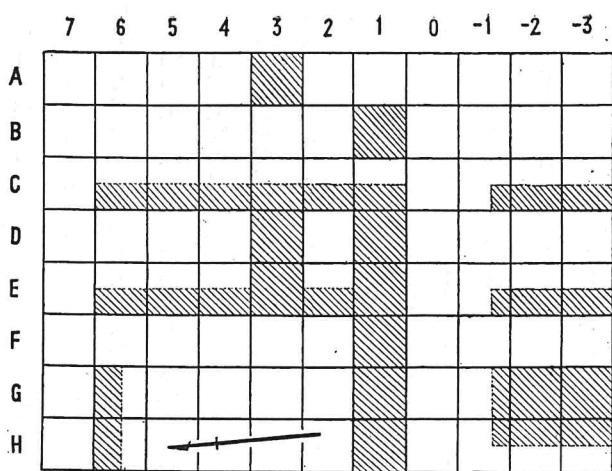
赤星直忠（責任者）、浜田勘太、西条好晴、川上久夫、神沢勇一、塚田明治、井上裕之、齋藤彦司、須賀由也、横須賀市立工業高等学校郷土研究部、県立横須賀高等学校歴史研究部、県立三崎高等学校郷土研究部

二、遺跡

1、遺跡の位置

三浦半島南部の西海岸、つまり相模湾岸には、きわめて湾入のふかい入江がいくつかならんでおり、そしてこれらの入江と入江との間には、標高二〇メートル前後の平坦な細長い台地が海にむかっている。これらの台地の上には、多数の遺跡がのこされている。三戸、鵜ガ島台、白須、諸磯などは、そのおもなものである。三戸式土器の標準遺跡である三戸遺跡は、鵜ガ島台のすぐ対岸にあり、また諸磯遺跡は油壺湾をへだてた台地上に存在している。

観光地として知られる油壺湾と、その北側の小網代湾との間にはさまれた台地の先端部は、かつて悲運の武将三浦導寸父子のたてこもった新井



第1図 発掘区域(斜線の部分を発掘した)

城の内郭のあったところであるが、この部分に接した東方の畑地を鶉ガ島台とよんでいる。平坦な台地上には、かなり広い範囲にわたって遺物の散布がみとめられるが、そのひろさは東西約一〇〇メートル、南北約五〇メートルをはかりうるであろう。この鶉ガ島遺跡の東の部分には、(後期弥生式土器および土師器(五領式)を包含する地点があり、これは「油壺熱帯植物園」の建設される工事にさきだつて、つまり一九五九年二月と四月の二度にわたり、その発掘調査(三浦市教育委員会主催)が私たちにしておこなわれ、堅穴住居址二例があきらかにされた。また、さらにその南側には、加曾利E式土器を出す地点がつづいている。一方、遺跡の北側は、崖状の急傾斜をなして海に面している。鶉ガ島台遺跡からは、このようにいくつかの時代の遺物が発見されるが、その主体はゆうまでもなく、茅山式土器の時期の遺物によって占められる。

2、発掘(第1図)

いわゆる茅山式土器が、もっとも多く散布している部分、正確にいえば、三浦市三崎町小網代戸張一一八一番地(地主石渡岩太郎氏)に属する地点に調査区域を選定した。ここは東西一七メートル、南北二二メートル以上の大きさを占める畑地であるが、この部分に二メートル平方の発掘区をマス目状に区劃し、東から西へ、A・B・C・D・E・F・G・H、南から北へ-3・-2・-1・0・1・2・3・4・5・6・7の符号をあたえた。ここは遺跡の中心部とみられる個所であるが、ボーリングステッキの探査によると、北寄りの部分では、地表から五〇センチ前後でローム層にたつし、遺物を包含する黒土・褐色土がうすいので、発掘の対象とはならなかった。また一部(0・-1列のA-H区)には耕作物があったため、その地区の発掘は許されなかった。したがって実際には、第1図に示したとき範囲にたいし発掘が進められた。いずれの発掘区においても、地表下約三〇センチまでは、耕作土でおおわれている。この下には、黒土・褐色土がつづきロームとなるが、調査区域の北寄りの部分(4・5・6列)では、黒土の堆積はほとんどみられず、耕土から直接褐色土に移行する。一方、南半の部分では、三〇センチ以上の厚さの黒土が堆積し、その下におなじく三〇センチくらいの褐色土がみられる。したがって、この状態を大きくみると、黒土層は北へいくにつれて厚さを減じ、また

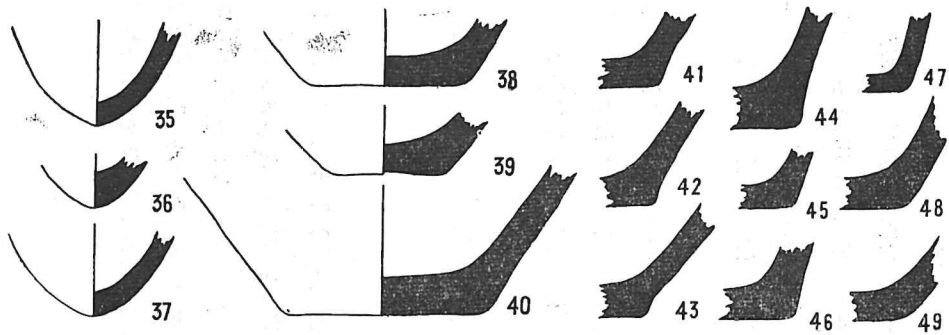
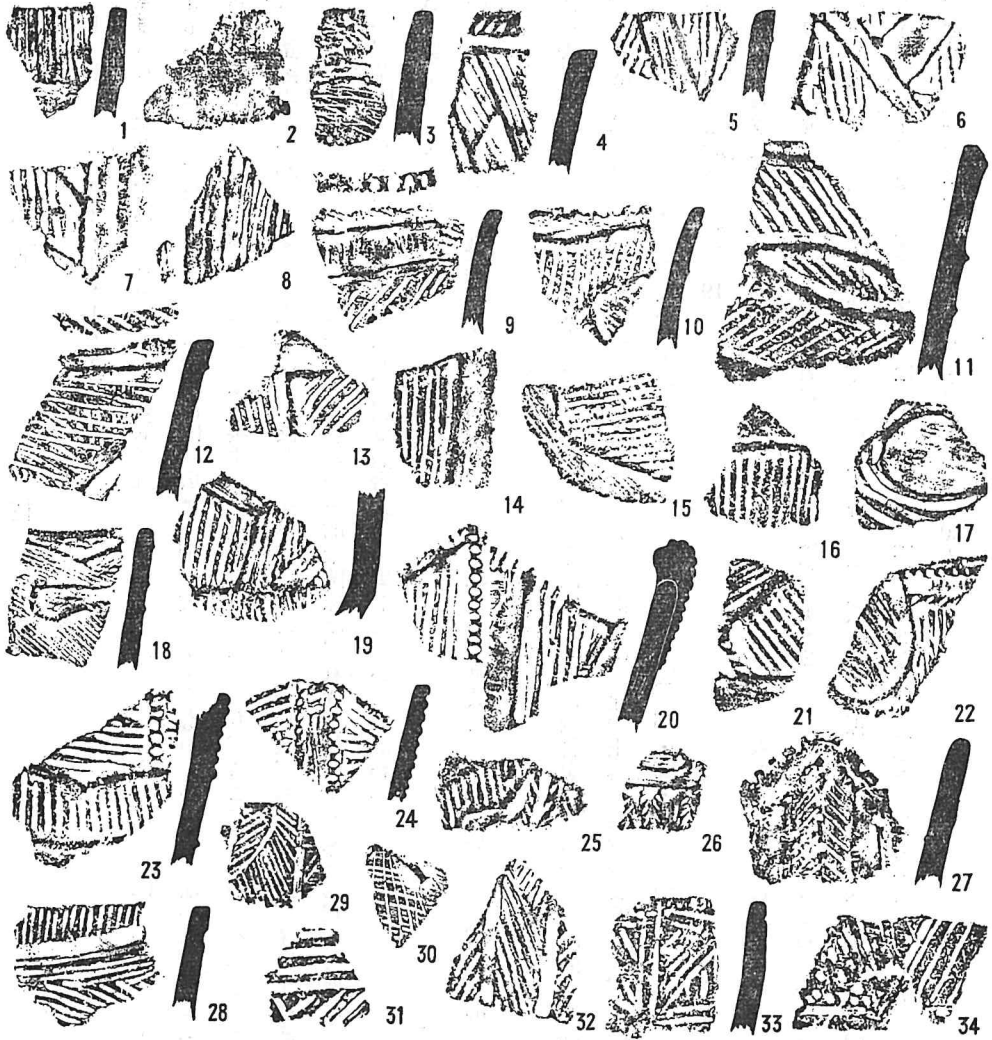
褐色土もそれに応じていくらか薄くなつてゆく。南半の部分に遺物が多かったのは、このように包含層が厚かつたからである。

E1-3区の発掘のさい、褐色土層中にあさく掘りこまれた堅穴住居址の一部が発見された。これは、その床面に密着して発見された土器片の型式からみて、土師器の年代に属するものと認められたが、近時の建築物の遺構と重複しており、その形状をあきらかになしえなかつた。また、E4区のおなじく褐色土のなかに、焼灰や炭末のふくまれたピットがみつかったが、これは直径五〇センチ、深さ一五センチの規模のもので、一種の炉址ではなかつたかと考えられる。付近からは、茅山式土器が発見されたのみである。

3、遺物の出土状態

遺物は各発掘区から発見されたが、その量は包含層、つまり黒土層・褐色土層の堆積の厚い南半の部分にやや多かつた。一方、これらはローム層直上、すなわち褐色土の最下部から、耕作土にかけての各層から発見されるが、その割合は一様ではない。出土した土器片二三四個についてみると、耕作土二〇五、黒土六六三、褐色土一四八九の割合であり、さらに褐色土の厚い部分では、上下二層に便宜的に分けてみたが、そこでは上層五〇五、下層二二五という差を示していた。このことからわかるように、包含層の主体は黒土と褐色土にあるということができる。しかし、その黒土あるいは稀に褐色土の上部からは、土師器や中期の縄文式土器が発見されることからみて、褐色土の上部以上の堆積はみだされしていると判断しなければならなかつた。したがって、私たちが大きな期待をよせていた野島式と鶉ガ島台式、鶉ガ島台式と茅山下層式との間の厳密な層位差別を理想的なかたちでつかむことはできなかつた。けれども褐色土のもっとも厚かつたG2・3区付近では、ローム層直上に野島式、褐色土下部に鶉ガ島台式、同中部に鶉ガ島台式と茅山下層式が、それぞれ深度を異にして出土するという事実を確認した。この事実は些細ではあるけれども、鶉ガ島台式土器の編年上の位置を決める有力な根拠である。

土器型式の包含の状態が層位的な秩序を明瞭にたもっていないため、それとともに発見されたいくつかの石器の共存関係は、正確には不明といわざるをえない。地表からは、おびただしい数の黒耀石や玄武岩などの石屑と、比較的多くの石鏃とが採集されているが、発掘でもまたそれらほめだつて多く発見された遺物である。このような現象は、他の遺跡ではあまり例のみられないことであり、この遺跡の一つの特色であろう。これらの石鏃や石屑は、いわゆる茅山式土器の時期にふくめられるものであることは疑いないが、さらにいくつかの理由からその大部分を、鶉ガ島台式土器にともなつたものと考えたい。



五

第2図 野島式土器と底部の集成 (1/3)

三、遺物

1、土器(第2・3・4・5図)

発掘された土器は、いずれも破片で総数約二五〇〇個をかぞえる。これらのなかには、いわゆる鶺鴒台式の器形を推定できる二、三の大きな破片もふくまれる。ほとんどすべての土器は、広義の茅山式に属するものであるが、なかに僅かではあるが中期の縄文式土器(加曾利E式)と、土師器の細片がまじっている。これらは隣接する地点からの混入であり、ここにとりあげるべきほどの内容のものではない。

この遺跡の、いわゆる茅山式土器は、しばしば述べてきたように野島式、鶺鴒台式、茅山下層式の三型式に細分され、それぞれの特徴を文様や部分的な器形の上にあらわしている。これらの量的な関係は、有効資料つまり型式認定の可能な資料によってみると、野島式九八、鶺鴒台式三四一、茅山下層式六七の割合となり、鶺鴒台式が圧倒的に多いことがわかる。

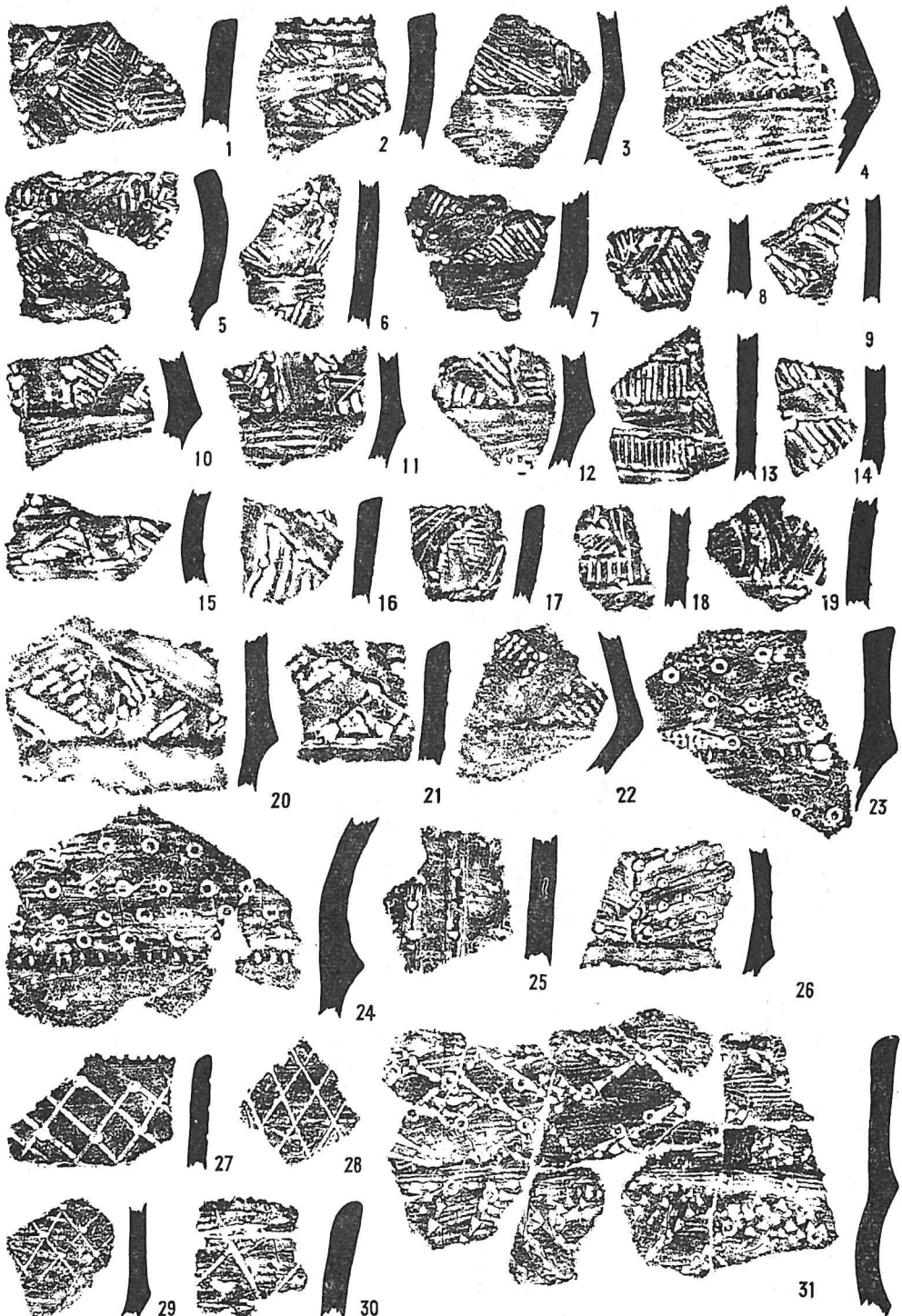
A、野島式土器(第2図)

ゆうまでもなく胎土に繊維をふくんでいるが、その率は他の二型式よりも少ない。また、相対的に薄手であり、口辺付近での厚さが一センチをこえるものはない。

口縁は、平縁のものと波状を示すものがあり、多くはその部分に刻目を有している。断面の形は、おのおのにおいていくらか異なるらしいが、一般的にはそのらない、先端の平らなものが多い。胴部には、他の土器の場合のように段、くびれはみとめられない。したがって全体の器形は、口縁からそのまま屈曲のないカーブをもって、やや鈍角な尖底(35・36・37)につながるらしい。しかし、なかには胴部でくの字形に屈曲する特殊な場合も考えられる(19)。

文様は、細隆起線をおもな要素とし、口辺部付近あるいは上半部にのみ施される。口辺部付近にのみ文様のあるものは、単純な平行の細隆起線文だけから構成され、しかも曲線を表現することがない(1・2)。上半部に文様のみとめられるものは、細隆起線のほかに微隆起線と集合沈線を付随的な要素とし、細隆起線がえがく多様な区画のなかを、微隆起線または集合沈線によってうめるといふ手法を特徴としている(4・27)。

このうち、細隆起線と微隆起線からなるものの文様は、直線的な表現にかぎられている(4・7)。また比較的ふとい細隆起線をもつものの上には、連続した押捺ないし刻目がくわえられている(20・27)。



第3圖 鷓方島台式土器(一) (1/3)

以上のほかに、沈線だけからなる一部の土器がある(28~34)。これらのうちのあるものは、より太い沈線の間を集合沈線がうめたもので、この手法は前述の土器のそれに共通している(29・32)。また、集合沈線のかわりに、刺突文で区画を充填したものもある(34)。

野島式土器の表面には、条痕の存在はほとんどめだたない。はじめ器面の整形のために施された条痕は、文様をかくにあたって、多くの場合擦消されたからである。したがって、文様のない胴下半には条痕のはっきりのことたものが多い。また裏面には、三分の二以上のものに条痕が施されているが、その方向は、口縁にたいし縦・斜あるいはまれに横というあり方をしている。これは、鶉が島台式の条痕がほとんど横方向であることと、きわめて対照的である。

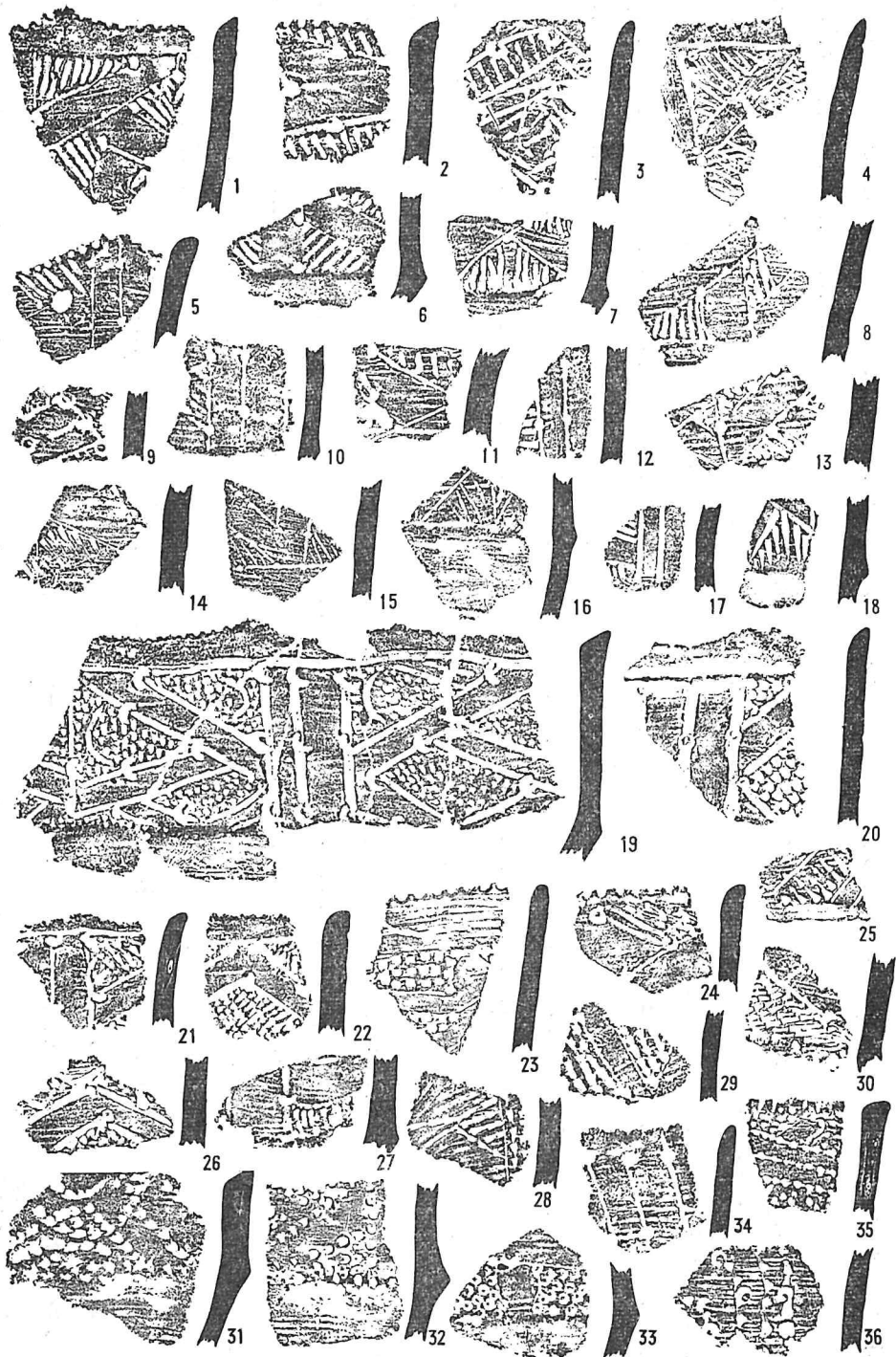
B、鶉が島台式土器(第3・4図)

この型式の土器は、一般に厚手であり、口辺付近での厚さはいずれも一センチ以上である。しかし、この厚手であるという意味は、野島式土器などと同くらべた場合、器形が大形化したということに関連している。繊維が多くふくまれているにかかわらず、保存がよいのは、焼成と原料が相対的にまさっていたためかもしれない。なかには、雲母をふくんだものがある。また、野島式や茅山下層式にくらべると、一般にあかるい色をおびている。

口縁は小さな波状を示したものが多く、その断面は内側へそいだような形が普通であるが、なかには尖りぎみのものもみられる(第4図・3・4・34)。口辺部は、ほとんど直立した形を示すが、まれには内反する傾向のものがある(第3図5)。器形においてもっとも特徴的なことは、段とくびれの存在である。段は、上下二段にみとめられ、この段と段の間にゆるいくびれ部がかたちづくられる。下の段以下、つまり胴部はなんらの屈曲を示すことなく、底径のやや大きな平底につながる。したがって全体の器形は、野島式のそれとはまったく異なっている。口縁と上の段との間、上の段と下の段との間、すなわち口辺部とくびれ部に文様帯が形成される。

文様は、低い細隆起線、沈線、および刺突を要素として、それらの併用による独自のデザインを表現する。沈線および刺突は、ほとんど例外なしに竹管を器具としている。竹管は径五、六ミリ前後の細いもので、これもあるものはそのまま押捺して円形文をつくり、あるものは半截して沈線文、刺突文、半円文などをえがく。ときには、一センチをこえるような太い竹管も使用されているが(第4図19)、これはきわめてまれである。

低い細隆起線を利用したもの(第3図1~26)は、まずそれをもって幾何的な区画——三角形、平行四辺形、矩形、あるいはそれらを組合せた——をえがき、そのなかを沈線(1~19)や、刺突(20~23)で充填し、空白な部分との間にコントラストをつくり、文様効果をあらわしてい



第4圖 鶴が島台式土器(二) (1/3)

る。そして、これが野島式と区別される大きな点は、細隆起線の交叉したところを起点に、一定の間隔に竹管が押捺されていることである。この他に、細隆起線を利用したものとしては、充填文をもたないものがあり、平行にならんだ線上に竹管の押捺のみが施されている(24・26)。

細隆起線の役割を、たんに沈線にかえたといえるものが多数ある(第4図1・30)。これもまた、沈線をもって一定の区画をつくり、そのなかを沈線(1・18)、および刺突(19・30)で充填し、さらに区画の交叉したところなどに竹管の押捺をくわえたものである。文様の型的な意味は、なんらかわるところがない。また、区画を沈線ではなしに、連続刺突文で格子目状にえがき、なかを交互に刺突でうめている例がある(第3図31)。このほかに、半截竹管でかかれた格子目文だけのものもあるが(27・30)、これにもその交叉点に押捺がみられる(27・29)。一方、半截竹管の押捺のみで文様のあらわされたものなどが、僅かにあるが(31・36)、これらも鶺鴒ガ島台式を構成する一部であることは、疑いない。

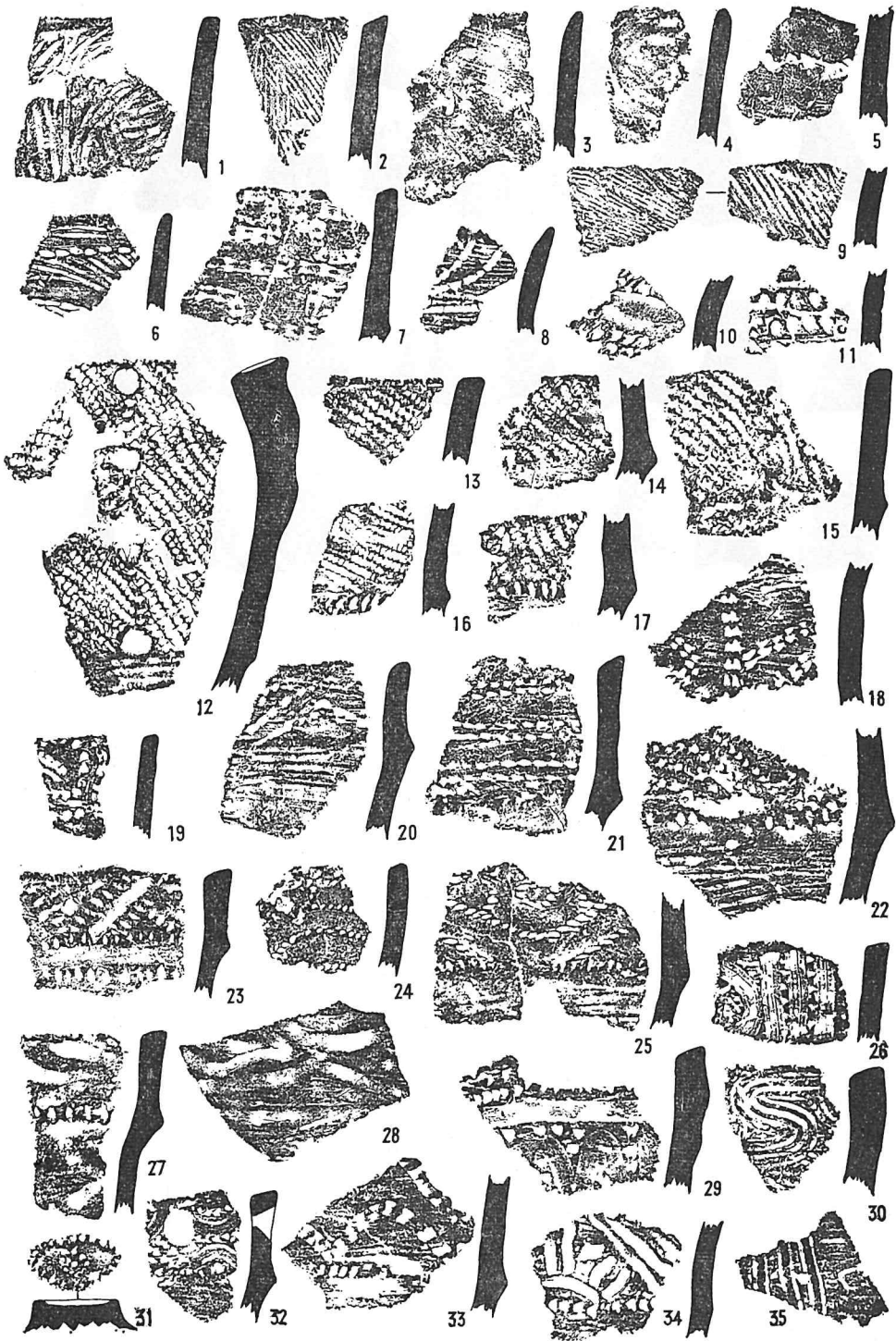
文様帯の部分の条痕は、多くの場合擦消されてうすれているが、それが横方向に施されたものであったことは、すべての破片に共通である。また、その裏面でも——胴部以下は別として——ほとんどすべては横方向の条痕をのこしている。これは、もとよりたんなる偶然の符号ではない。貝殻をもって器面を整形しようとするとき、段やくびれが存在する場合には、それを縦方向に動かすことは不可能である。横方向の条痕は、器形に制約されての結果であったと考えられる。

C、茅山下層式土器(第5図)

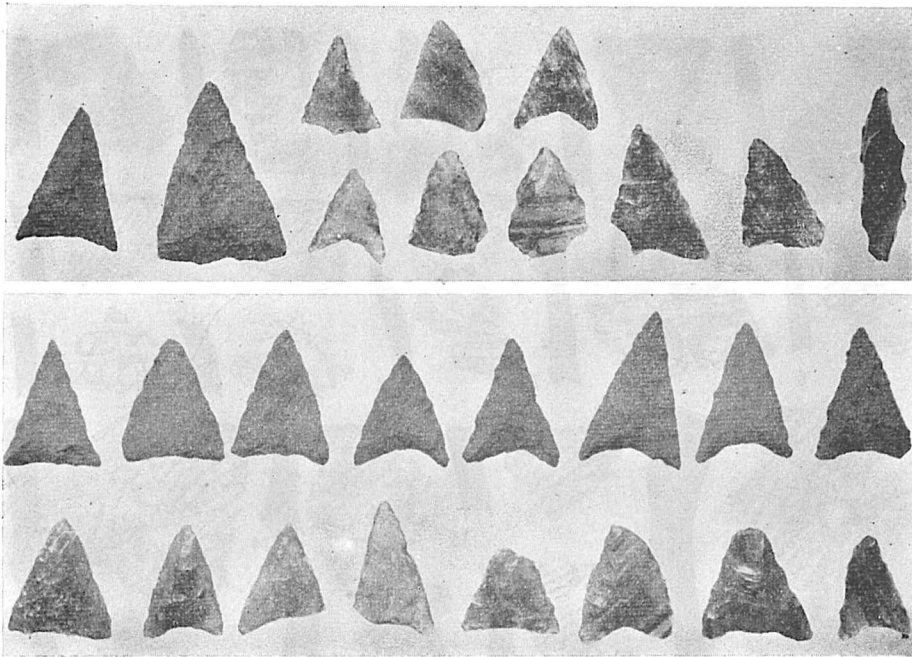
この土器もまた概して厚手であり、鶺鴒ガ島台式に共通する点が多い。口縁は、ゆるい波状をなし、その頂部に把手ないし突起をつくる(12・30)。やや外反した口辺は、段からくびれ部へとつづくが、その屈曲の度合は鶺鴒ガ島台式の場合よりもよい。また段は、一段だけのものがある。底部は平底であったことが疑いない。

文様は、列点文、凹線文などをおもな要素としている。これらのうちには、列点文のみもの(18・21)、列点文と凹線文の併用されたもの(22・25)、凹線文のみもの(27・28・34・35)などの区別がある。列点文の一部は、あきらかに半截竹管で施されているが(18・20・21)、凹線文と併用されているものには、異なった器具が利用されている。凹線文には、指頭でかかれたとみられるもの(22・24・25・27・28・29)と、そうでないもの(23・26・34・35)とがある。これらの文様は、それぞれ直線的な、あるいは曲線的なデザインを構成するが、その姿は鶺鴒ガ島台式とも、また野島式とも、かなり異なっている。

斜縄文のある土器が若干発見されたが、これらは茅山下層式にふくめられるものと思われる。とくに、独特の把手をもったもの(31は12の把手



第5図 茅山下層式土器その他 (1/3)



第6図 石 鏃 (4/1)

の頂部)や、段の稜の部分に刻目をつけたもの(16・17)などは、この型式の一つの特徴である。

その他、メルクマールを欠いているために、型式の認定の困難なものはいくつかある。条痕や擦痕のみの、形の単純なもの(1~4)は、野島式土器(野島貝塚資料)³⁾のなかに、しばしばみられるが、しかしこのような土器が鵜ガ島台式や、茅山下層式にまったく伴わないとは断言できない。条痕のうちには、表面と裏面とでその太さを異にするもの(9)があるが、これは貝殻の部分をかがえてつけたためであろう。細い沈線で線画のかかれた例(5)や、その他の文様の土器(6・7・8・10・11)については、文様の構成が不明であるため、確信をもった認定がくだせない。したがって、ここでは資料のみを図示して、類例の発見をまちたい。

2、石 器(第6図)

発掘によってえられた石器には、石鏃・礫器・磨石・石皿などの種類があるが、このうち石鏃をのぞいた他の石器は、全部で数点をかぞえるのみである。

石鏃は、黒耀石と玄武岩を原料としたもので、その利用された率は、前者がやや多い。形は、特徴にとぼしい二等辺三角形がほとんどで、底部にはごく僅かの湾入のみられるのが一般である。また、比較的分厚のものが多く、製作の技術は立派とはいえない。注意される一つの点は、黒耀石製のものには欠損した例が多いのにたいし、玄武岩製のものにはそれがほとんどみられないということである。これは、黒耀石が打きかきよいという利点の反面、

欠けやすい弱点をもっていることに、原因の一つがあると思われる。この点が、製作や使用の上になんらかの区別が意識されていたであろう（第6図の上段は発掘資料、うち左側二例が玄武岩製である。また右端のものは、柳葉形を示す石鏃であり、褐色土層上部から出土した。下段は、表面採集資料であり、上は玄武岩製、下は黒耀石製、おもなものだけを選んだ）。

礫器は、細長い自然礫の先端の、片面にのみ打ち欠きをくわえたもので、上半を失っている。磨石は、割れた礫の平坦面に磨痕をとどめたもので、一般にいう磨石のようにものをすりつぶすためのものではなく、おそらくものを磨くための道具であったと思われる。石皿は、両面に凹みのある安山岩製のものであるが、小さな破片になっている。その他、黒耀石の剝片に使用痕をのこしたものが、二、三あるが、これらも一種の道具に役立てられたのであろう。また、多数の剝片や石屑が採集されたが、ゆうまでもなくこれは石鏃などを製作するさいに生じたものである。

四、鵜ガ島台式土器

1、型式の成立

鵜ガ島台遺跡から発見された一群の土器を、「鵜ガ島台式」の名称でよぶことをここにあらためて主張したい。

鵜ガ島台式土器は、いわゆる茅山式土器の細分された諸型式、野島式、茅山下層式、茅山上層式などは、はっきり区別される特徴をそなえている。まず、器形の上でもっとも顕著な点は、段とくびれと平底の存在であろう。これは、野島式土器との調然たる差をあらわすだけでなく、平底の普遍化がこの型式をもってはじまることを示している。段およびくびれの発生は、ふるく田戸上層式土器の時期にさかのぼるのであるが、これは繊維の混入とむすびついて、より大形の土器を製作しようとする技術的な要求にねざしていたと思われる。それがふたたび、平底の普遍化をもたせてあらわれたことの背後には、土器の大形化という要求のほかに、さらに別の意味がひそんでいたと想像されよう。⁽⁴⁾この特徴的な器形は、茅山下層式にひきつがれ、茅山上層式にいたって消滅するが、この一連の関係から両者のつながりを知ることができる。

しかし、鵜ガ島台式と野島式との関係は、文様の上では、はっきりしたつながりを示している。野島式の主要な文様要素である細隆起線と、それが表現するモチーフの系譜は、鵜ガ島台式のなかに、ほとんどそのままひきつがれる。この二つの型式の間の主要な文様のちがいを、しいて指摘するならば、文様単位の区画の交叉点に押擦があるかないかの差のみであろう。それほどに両者の文様の性格は、共通している。一方、茅山下層式との文様の関係は、一部のもの——刺突文とそのデザイン——につながりを感じさせるが、大部分は異質のものであり、そこにあきらかな境

界がひかれる。

鶺鴒ガ島台式土器は、段とくびれと平底の器形を、また文様單位の区画の上に抑捺をもつ幾何的な細隆起線文・沈線文を、それぞれメルクマールの典型とする型式である。そして、器形の上で茅山下層式との、文様の上で野鳥式との系統的な関連を示していると理解できる。⁽⁵⁾

2、編年と分布

すでに述べたように、文様や器形の形態的な關係から、野鳥式——鶺鴒ガ島台式——茅山下層式の順序を推定することが可能であるが、今回の発掘によってそれら三型式の上下關係をあきらかにし、その推定を一応裏付けることができた。鶺鴒ガ島台式土器の編年上の位置は、野鳥式の直後、茅山下層式の直前におかれるべきであり、この序列は今後さらに確証されはしても、くつがえされることはないであろう。

一方、鶺鴒ガ島台式土器およびその系列にふくめられる土器は、きわめて広範な分布を示している。現在知られているかぎりでの西限は、滋賀県石山貝塚であり、また東限は宮城県槻木貝塚である。さらに南限は、伊豆七島の御蔵島におよんでいる。⁽⁶⁾しかし、いま与えられている資料の範囲からでは、この近畿以東から東北南半にわたる地域のなかでの、斉一性や地域性のあり方を具体的に指摘することは困難である。また、分布の上で空白な地域ものこされている。けれども、茨城県・千葉県方面に分布するものと、神奈川県・伊豆地方方面に分布するものとは、文様構成の上などに若干のひらきがみとめられる以上、今後はそれらの研究を積極的に手がけていかなければならない。

なお、三浦半島で鶺鴒ガ島台式土器の発見された遺跡としては、夏島貝塚・馬ノ背山遺跡・三戸遺跡などがあげられる。また、横浜市神奈川区入江町溝ノ下遺跡（池谷健治氏資料）は、鶺鴒ガ島台式土器の好資料をほぼ純粋なかたちで出土した遺跡として、すくなくならぬ価値をもっている。

五、お わ り に

以上、鶺鴒ガ島台遺跡の発掘調査の結果と、鶺鴒ガ島台式土器の概念について、きわめて不十分ではあるが述べてきた。私たちは、このささやかな仕事の上に、さらにつきぎの仕事を積みあげていこうと思つている。したがって、この敘述のなかの不備や欠陥について、適切な批判のよせられることをのぞんでやまない。

(注)

- (1)、赤星直忠・岡本 勇「茅山貝塚」横須賀市博物館研究報告第一号
- (2)、仮報告として、「油壺遺跡調査概報」(三浦市教育委員会)がある。
- (3)、赤星直忠「神奈川県野島貝塚」考古学集刊第一册
- (4)、これらの問題については、現在執筆の準備をすすめている論文「尖底土器の終焉」のなかでとりあげる。
- (5)、他の遺跡の資料によれば、鶺鴒島台式の口縁にも把手が付随する。しかも、これは筒形の特異な形状のもので、茅山下層式などにはみられない。
- (6)、平安学園考古学クラブ「石山貝塚」一九五六年、山内清男「関東北に於ける繊維土器」史前学雑誌第一卷二号、後藤守一・麻生優他「三宅・御蔵両島における考古学的調査」東京都文化財総合調査報告第二

遺物発見地地名表

(三)

横須賀市八幡・丸畑	縄文式土器(子母口式・茅山式・関山式・黒浜式・諸磯a・b・c式・阿玉台式・加曾利E式) 弥生式土器・土師器	赤星直忠
久里濱・こんびら山山頂	石鏃	高橋恭一
鶺鴒島小原(小原台南山腹)	縄文式土器(加曾利E式)	
吉井町台崎(吉井貝塚)	縄文式土器(稲荷台式・田戸下層式・田戸上層式・子母口式・野島式・茅山下層式・茅山上層式・粕畑式・入海式・関山式・諸磯b式・加曾利EII式・称名寺式) 弥生式土器・土師器	横須賀考古学会
三浦市三崎町諸磯・むかい崎	縄文式土器(勝坂式)	浜田勘太
鶺鴒島台	縄文式土器(勝坂式・加曾利E式)	